



“なりわい”の探究を通じ 地域社会の未来をつくる力を育む

やがみ
矢上高校(島根・県立)

高校魅力化の重点施策として、地域との協働による探究活動に力を入れてきた矢上高校。自分のWillから出発する、将来のなりわいを意識した取組のなかで、生徒は自己肯定感や挑戦意欲を高めています。

こんな学校は必読!

- ☑ 学校の縮小や存続に対する危機感がある
- ☑ 地域との協働体制を強化したい
- ☑ 生徒のソーシャルスキルの低さがネックで探究が深まらない

取材・文/藤崎雅子

県外募集と地域探究で 学校魅力化を推進

島根県中部の中山間地域にある矢上高校は、普通科と産業技術科を設置する小規模な学校だ。人口減少や少子高齢化が進む邑南町に唯一の高校であり、地域の未来を担う人材の輩出が期待されている。駒川一彦校長はこう語る。

「本校は76年前に『町に高校を』という地域の人々の熱い思いと奉仕によって誕生しました。十数年前、学級減の危機を住民が立ち上がって阻止するなど、地域とのつながりが非常に強い学校です」

生徒数が漸減するなか、2014年より県の事業を活用して地域との協働による「魅力ある高校づくり」をスタート。町と連携して矢上高校将来ビジョンを掲げ、教育コーディネーターを配置して探究活動の充実に力を入れるとともに、県外からの生徒募集も始めた。現在、全国各地から生徒が集まるようになり、県外生が約15%を占める。主幹教諭の乙原泰博先生はこう話す。

「異なる地域で育ち、目的意識や価値観、進路の方向性もさまざまな生徒たちだからこそ、一つの価値観に縛られず、お互いに刺激を与え合いながら学んでいます」

21年、同校は地域住民や保護者との議論およびアンケートで集めた意見を基に、第2期の将来ビジョンを策定した。その基本理念は「地域社会の未来を共に生き抜くたくましい人間づくり」だ。この将来ビジョンと、校訓「腕に覚えのある人間・筋

金の通った人間・思いやりのある人間」に基づく、教育のグランドデザインを設定。町内の団体や企業、小中学校などを組織化したコンソーシアムと連携し、教育内容のさらなる充実を図っている。

「本校には一見大人しい生徒が多いですが、機会さえ得ればどんだん行動できる力をもっています。その機会をいかに豊富に設定するかが、我々の使命だと考えています」(駒川校長)

Will・Can・Needsの重なりで 自分のなりわいを考える

目指す生徒像の実現に向けて普通科で力を入れているのが、総合的な探究の時間(総探だ(図1))。活動の幹を「なりわいを探究すること」とし、将来の目標や進路への接続を意識しながら展開している。探究活動の企画・開発に携わる教育コーディネーターの小林圭介さんはこう話す。

「なりわいとは、単に生活の糧を得るものではなく、自己実現や地域社会とのつながりを大切にしたいもの。雇用が少ない地域にも、なりわいと言える仕事はたくさんあります。さまざまな困りごとがあるなかで、それを解決する仕事を自分でつくることも可能です。生徒たちが自分のスキルを活かしてなりわいをもち、地域社会や他者とながら、自分も他人も幸せにできることを目指しています」

自分のなりわいを考えるためのプログラム設計には、Will(やりたいこと)・Can(自分ができること)・Needs(社会が求めていること)のフレームワークを活用してい



School Data

1948年設立／
 普通科・産業技術科
 生徒数269人(男子145人・女子124人)
 進路状況(2024年3月卒業生)
 大学28人・短大3人・専門学校等39人・
 就職15人・その他1人

Outline

普通科(国公立大学進学を目指す探究コース・幅広い進路を目指す総合コース)、産業技術科(野菜や畜産、工業などを学習)を併設。2014年に県の事業を活用して高校魅力化の取組をスタート。コーディネーターを配置し探究活動を推進。県外募集を実施し、現在生徒の出身は町内約65%、県内約20%、県外約15%。24年度文部科学省「高等学校DX加速化推進事業」に採択。



教育コーディネーター
小林圭介さん



主幹教諭
乙原泰博先生



校長
駒川一彦先生

る。3つの重なる部分に自分のなりわいがあるとし、1学年は個人の進路や興味関心に目を向け(WIII)、2学年は地域の課題解決に取り組み(Needs)、3学年では目指す進路に必要な力をつける(Career)ことをテーマとしている(図2)。

ソーシャルスキルをベースに探究活動の質を高める

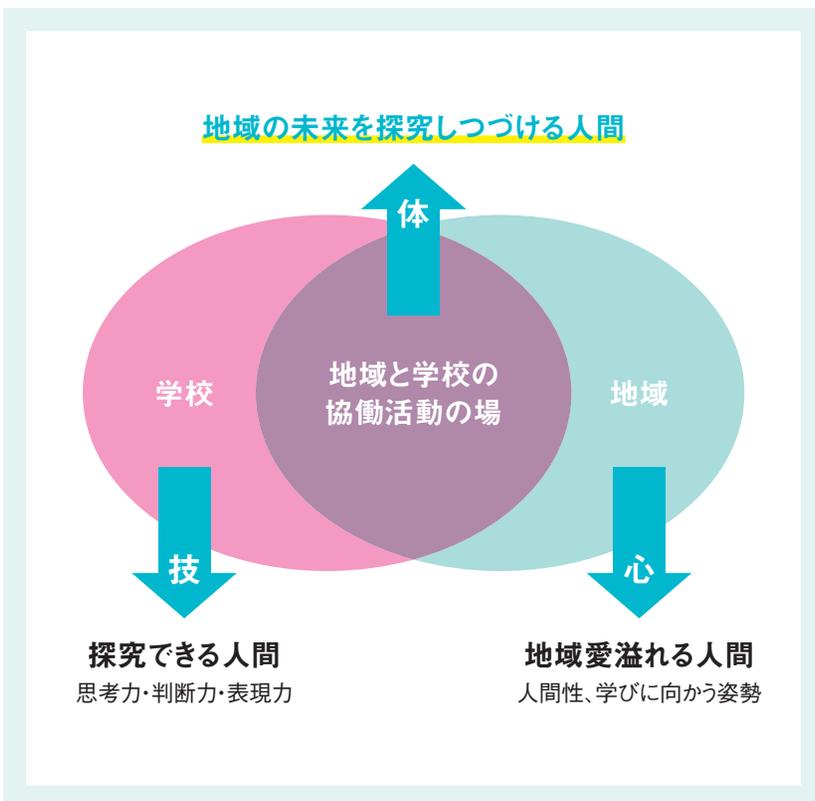
総探の具体的な内容を見ていこう。今年度、3年間の総探で特に力を入れているのが、1学年の活動だ。

同校は毎年実施する生徒アンケートのうちの3項目「地域の課題の解決方法について考える」「将来、自分の今住んでいる地域で働きたいと思う」「地域社会などでボランティア活動に参加した」を探究活動の評価として利用している。その過去5年間の推移を見ると、肯定的な回答は6割前後で、緩やかに増加している。しかし、「活動の改善や充実を図っても劇的な変化は見られない」との課題感があつた。そこで着目したのが、生徒のソーシャルスキルを上げることだ。

「話す、聞く、書く、関わる」などのソーシャルスキルは、探究活動に取り組むうえでのインフラとも言えます。いきなり「社会課題を考えよう」ではなく、まず人との関わり方を学んだり、関わったことで喜びや気づきにつながったり。そうした体験によってソーシャルスキルを高めることが、その後の探究活動の質を上げるのではないかと考えました(小林コーディネーター)

1学年1学期は探究基礎として、まず

図1 矢上高校と地域の協働イメージ



グループで話し合うコツやアンガーマネジメントを学習。そのうえで教員側から提示した地域課題に取り組み。生徒によるテーマ設定はあえて省略し、地域に関わる経験にフォーカスした活動だ。今年度は少子高齢化を取り上げ、「高齢者向けスマホ教室」や「矢上高校のPR活動」に取り組み、活動内容を地域の方に向けて発表した。

「最後のリフレクションでは、生徒から『達成感があつた』『次からはもっと積極的に話し合いに参加したい』『自分はリーダーに向いているかもしれない』などさまざまな

気づきや学びの声が上がりました。次に取り組む探究活動に生きてくると思っています」(小林コーディネーター)

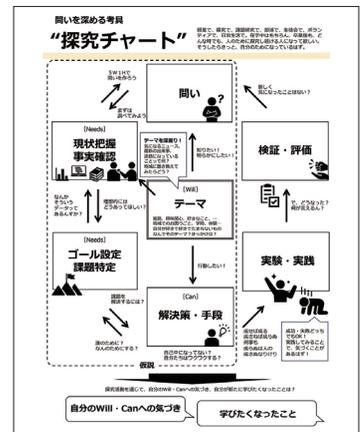
1学年2学期は、地域の専門家による出張授業やフィールドワークで地域課題とその解決に向けた取組について学び、生徒一人ひとりが探究したいテーマを検討。それを基にチームを組み、2学年で探究活動に取り組む。昨年度は、子ども食堂と連携した世代間交流の実践や、地元産ハーブを使用したヘアオイルの商品開発などが行われた。3学年では、そうした経験も

図2 総合的な探究の時間の学年別目標

1年生	2年生	3年生
探究の基礎(1学期) 地域探究I(2・3学期)	地域探究II(年間)	進路探究II(1学期) 個人面談など(2・3学期)
個人の進路希望を明確にできており、自分が探究したいことが明確になっていることが目標。	「自分のなりわい＝個人×地域」を考え、活動(＝探究)し、地域社会や他者からフィードバックを受け、進路希望を自分の言葉で語るができるのが目標。	探究したことが、学問や産業のなかでどのような位置づけかを理解し、社会の中での自分の役割に気づいていることが目標。

踏まえて進路目標を設定し、その実現に向けた個人活動が中心となる。
また、普通科総合コースの2・3学年は学校設定科目「起業探究」で、社会実装を目指した実践的な探究活動にも取り組む。起業を想定したビジネスプランを作成し、外部コンテストにも挑戦している。

図3 探究チャート [ダウンロード可](#)



探究の4つのプロセスを基に作成した「探究チャート」。一つの探究が検証・評価まで到達したあと新たな問いにつながる、探究には終わりが無いことを表している。



協育パートナーの声かけや質問が、各グループの探究を深めるきっかけに。



廊下に総探の発表資料や活動状況などを掲示し、広く情報共有している。

地域も教員も学ぶ 探究の支援体制づくり

総探の支援体制については、近年、「生徒が学び、地域が学び、教員が学ぶ共同体の創造」という方針を掲げている。地域や教員にとっても「学ぶ」との意味づけられているのが特徴だ。

同校では、生徒の探究活動に伴走する地域の人を「協育パートナー」として組織化している。広く公募して集まった人に対し、活動の趣旨や伴走方法などの研修を実施したうえで任命。毎週グループチャットで情報共有や意見交換を行い、目線合わせをしている。総探の授業には可能な範囲で参加し、地域情報の提供や、活動を深掘りする質問などを行う。今年度は地域の自治会や商工会、NPO法人、県外の大学や企業などの12人が協育パートナーとなり、生徒の活動を支えている。「協育パートナーの皆さんは、生徒に何かを教えるというより、一緒に地域課題に取り組むという意識で参加してください」といいます。それによって地域にも新たな視点や

気づきをもたらすことができ、学校づくりと地域づくりの相乗効果が生まれることを狙っています(小林コーディネーター)

協育パートナー以外にも、生徒は各テーマに合わせて、地域の企業・団体や個人と連携して探究を進める。生徒数約270人の同校に、昨年度は約80人も地域の人が関わった。探究成果の発表会には地域の人も招き、生徒・地域・教員がそれぞれの立場から探究の意義を語り合うパネルディスカッションを行うなど、地域にとつての学びも意識している。

また、校内体制については、時間割を工夫し、全教員が総探に参加することを推奨している。

「担当教科の授業だけではなかなか生徒の実態は見えてきません。生徒の興味関心や目標と関連する探究活動に伴走することで、生徒の良さを見つけて伸ばし、生徒の幅広い面を踏まえた進路指導に活かしてほしい。また、本校が地域の方にだけ支援を求めているかも知ってほしい。それが、本校の教員としての意識や視野の広がりにつながるのではないかと期待

しています(駒川校長)

しかしながら、教員の探究スキルや経験値には個人差がある。そこで最小限の負担でナレッジを共有するため、職員会議後に15分程度を使った「プチ研修」を定例化した。ほか、探究のワークシートやスライド、外部研修の動画や資料をクラウド上に集約し、廊下に「探究ボード」を設置して各グループの探究の進捗を掲示して教員が随時アドバイスやコメントをつけられるようにするなど、さまざまな仕掛けを行っている。

また、探究プロセスが俯瞰できる独自の「探究チャート」を導入(図3)。これにより、生徒自身が活動の現在地と次のステップを見据えながら主体的に行動できるだけでなく、協育パートナーや教員にも生徒の活動状況がわかりやすい。

「各チームは探究チャート上に付箋を貼るなどし、次に何をするか、どう行うと効果的かを議論しながら進めていきます。教員や協育パートナーも探究チャートで各チームの状況を把握し、テーマを深める問いの投げかけや助言を行っています(小林コーディネーター)」



1年生が取り組んだ高齢者向けのスマホ教室。人と関わる喜びを経験。



「地域の医療を考える」をテーマに高齢者サロンで活動。

図4 アンケート結果に見る生徒の変容

(2023年度3年生の1年生の時との比較 / 抜粋)

自己肯定感

- 自分には良いところがあると思う 19Pt ↑
- 私は、自分自身に満足している 26Pt ↑
- 私が関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない 17Pt ↑
- できるだけ多くの立場から考えようとする 13Pt ↑

ウェルビーイング

- 生活全般の満足度 14Pt ↑
- 自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している 13Pt ↑
- 将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたいという気持ちがある 13Pt ↑
- この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる 16Pt ↑

Interview

好物のカレーで始めた探究を通じさまざまな地域課題への関心がアップ

県外募集を利用して、神奈川県からやってきました。この学校を選んだ最も大きな理由は、地域の食や農を活用した活動が面白そうだったことです。入学後、実際に好物のカレーの開発に取り組みました。カレーを通じたフードロス削減を目指した、余った食材を使ったカレー作りのプロジェクトです。開発したカレーは、総探で子ども食堂や高齢者施設で提供するなど、広がりました。3年生になって高校生活を振り返ると、自分から地域に関わっていく経験をする中で地域社会の課題を自分ごととして考えられるようになり、地域の方々と交流するなかでコミュニケーション力が上がったと感じます。多様な地域社会の課題解決を学びたいという目標もできました。地域の課題は



いろんな問題が絡み合っていると思うので、卒業後は文理融合型の学部に進学し、多角的な視点から課題解決を探っていきたくです。
(普通科3年生・永倉琉晟さん)

自己肯定感が上昇し 積極的に挑戦するようになり

同校での学びによって、生徒はどのように変化しているだろうか。23年度の3年生へのアンケート結果を1年生の時の結果と比較すると、自己肯定感やウェルビーイングに関する項目の上昇が目立つ(図4)。なかでも「自分自身に満足している」は26ポイント、「自分には良いところがある」は19ポイント上昇している。

そうした意識の変化が、積極的な行動につながっているようだ。昨年度、地域でボランティア活動を行った生徒は108人。ある生徒は、総探で地域医療をテーマに取り組んだことをきっかけに、ボランティアグループを立ち上げて高齢者向けサロンを開催した。このように授業の枠組みを越えて活動する例も少なくない。教職員

は口を揃えて「自ら挑戦する動きが広がっている」と話す。

そのなかで生徒はさまざまな力を育んでいる。卒業生からは「客観的にものごとを考えるようになった」「計画的に取り組む力が身についた」「話したことのない地域の人とコミュニケーションする機会が増え、人との関わりを楽しんでいるようになった」など、さまざまな成長を自覚する声が上がっている。

「例えば学校説明会で見られる中学生への傾聴の姿勢にも、生徒の成長を感じます。地域の大人たちと接し、しっかり傾聴してくれた経験から学び取ったのではないのでしょうか(小林コーディネーター)」

また、地域での活動から将来の目標を見つける例も多い。地域の空き家対策に取り組みたいと地域系学部に進学した者、地域の小学生の放課後施設でボランティア

活動をすることから「子どもの成長って面白い!」と気づき保育を学ぶ学校に進学した者:それぞれのなりわいに向けて歩み始めている。

卒業生のなかには、協育パートナーとして後輩を支援する者も出てきた。

「先輩の探究活動に伴走する姿から、高校時代よりさらに成長している様子がかがえます。在学中の経験をベースに、地域の未来を共につくっていく意欲と力が確実に育っているのではないのでしょうか(乙原先生)」

小中高が探究でつながり 子どもの学びを深めていく

現在、同校は26年度からの第3期将来ビジョンの策定に向け、地域との協議を重ねている。その大きな柱には、小中高連携を据えているという。既に昨年から、町内

の小学5・6年生と同校生徒のそれぞれの探究発表をお互いに聞いて意見交換を行う取組が始まっており、今年度は中学校との連携も実施予定だ。

「1年限りの探究ではなく、先輩が取り組んだテーマを先輩が引き継いで深めていく取組も検討しています。小中高が探究を軸につながり、学校種別を超えて子どもたちの学びを深めていきたいですね(乙原先生)」

10年以上取り組んできた探究活動も、生徒により効果的な実践にするために、まだできることがあるようだ。駒川校長はこう意気込みを語る。

「これからも生徒の『やってみたい』を育み、チャレンジを応援する学校でありたい。地域で育てたい生徒像を共有し、連携して子どもたちを育てていきたいと考えています」